

I 水稻

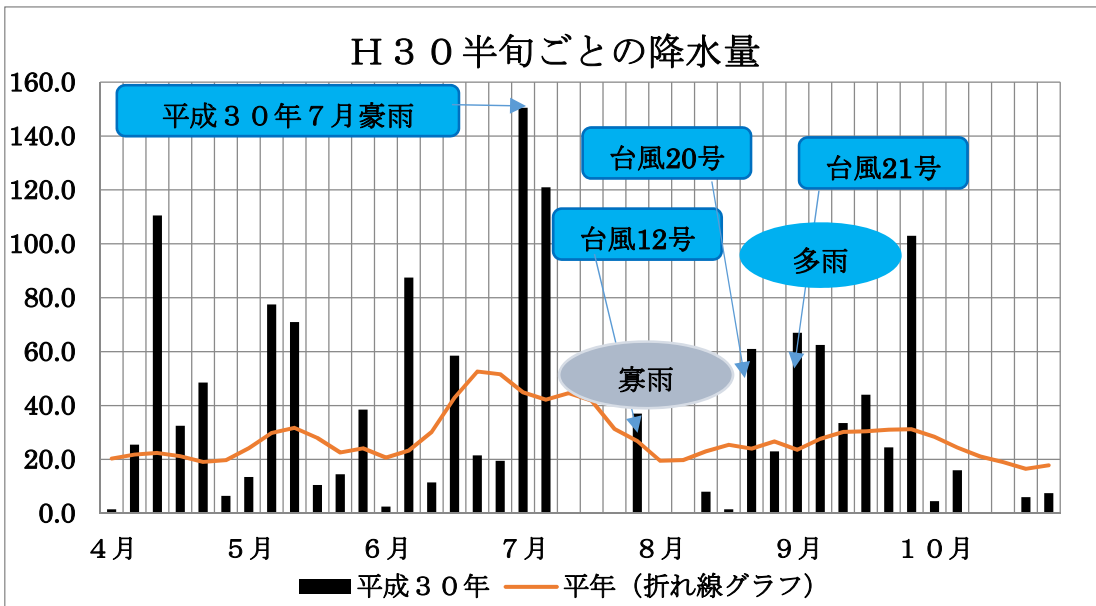
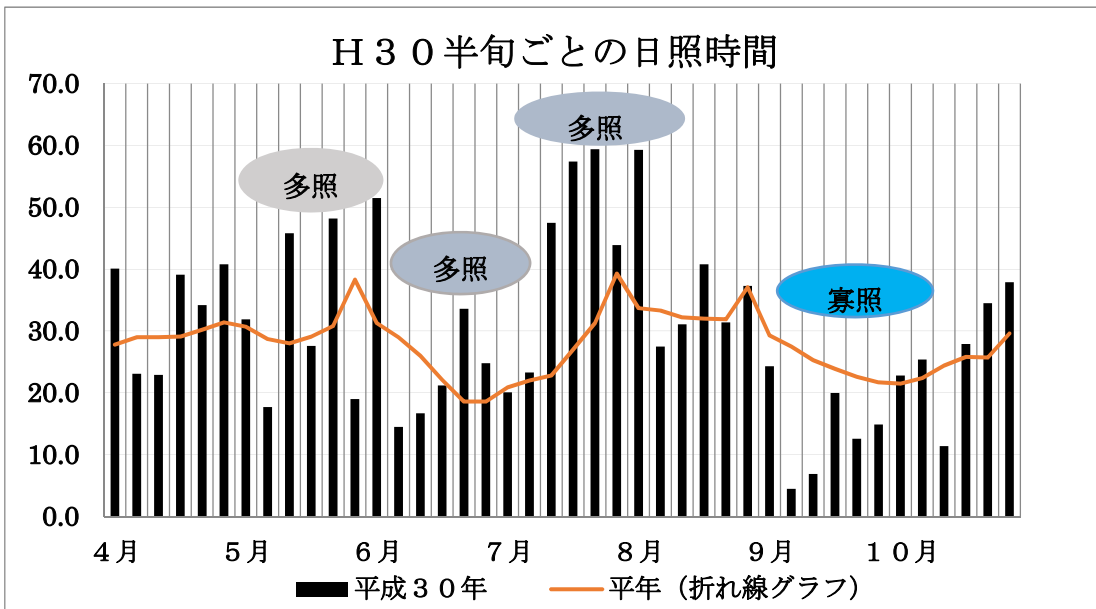
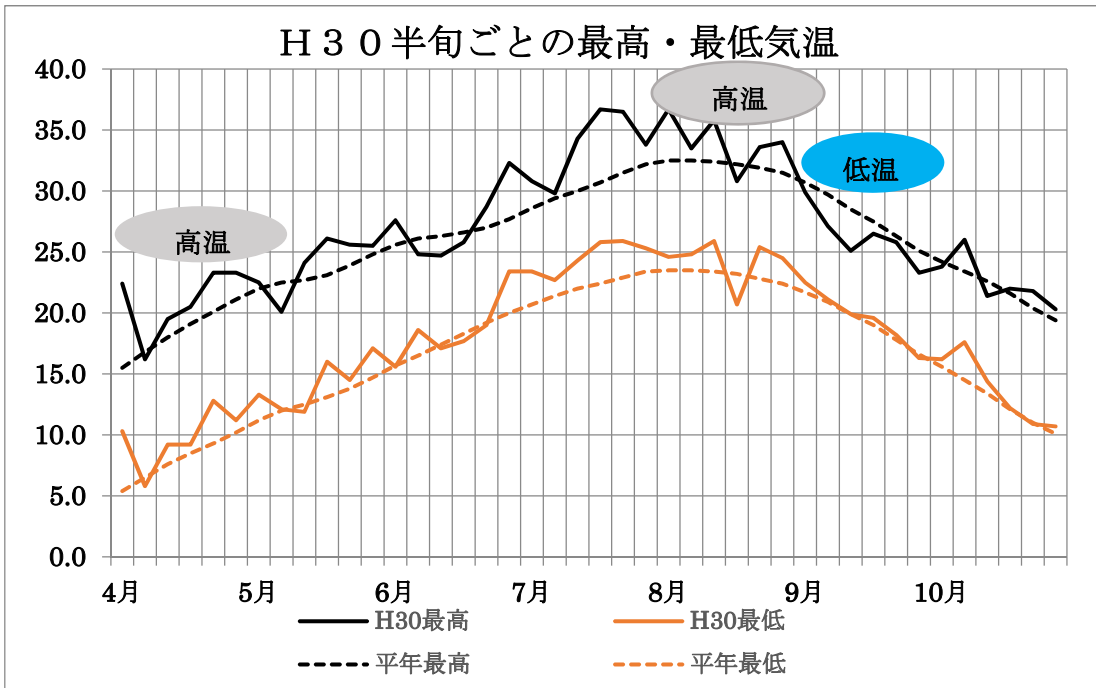
1. 平成30年産米の概要

(1) 気象と生育

- ・ 5月：平均気温は高く推移し、日照時間は中旬が平年より多かったが上旬と下旬が少なかった。降水量は平年よりかなり多かった。
- ◆ 5月31日時点では草丈は平年より短く、茎数は平年よりかなり少なかった。(平年の約0.8倍)葉数は平年より「コシヒカリ」が少なく、「秋の詩」が平年と同様であった。
- ・ 6月：平均気温は、全体を通して平年並みに推移し、日照時間は、下旬にかなり多かった。梅雨入りは6月6日頃となった。(昨年6月7日頃)
- ◆ 6月20日時点では草丈は平年より短く、茎数は平年より少なく、葉数は平年並みであった。
- ・ 7月：上旬の記録的豪雨の影響で、降水量が非常に多かった。気温は非常に高く推移し、日照時間は中旬以降非常に多く推移した。梅雨明けは7月9日頃(昨年7月13日頃)となった。
- ◆ 「コシヒカリ」の幼穂形成期は7月3日で平年と同等で、出穂期は7月26日で平年より1日早くなった。「秋の詩」の幼穂形成期は7月16日で平年より1日遅く、出穂期は8月12日で平年より3日遅くなった。
- ・ 8月：気温はかなり高温となり、日照時間も多かった。下旬では、台風20号の影響で降水量が非常に多かった。
- ・ 9月：上旬は、台風21号の影響で降水量が非常に多く、下旬は台風24・25号の影響で降水量がかなり多かった。気温は平年より低く推移した。
- ◆ コシヒカリの成熟期は幼穂形成期以降の高温により生育が進み、出穂期同様平年より1日早かったが、9月上旬以降の気温が低く日照時間が少なく経過したことから、秋の詩の成熟期は出穂期同様平年より3日遅くなった。

(2) 作況指数

12月に発表された作況指数は、全国で「98」(529kg)で「平年並み」となり、滋賀県では「99」(512kg) 湖南が「99」(521kg)で、「平年並み」となった。



(3) 管内の品質（1等比率）の状況

表-1 JAおうみ富士の品種別1等比率の推移 ※個袋検査のみの数値 (%)

品種	H30年産	H29年産	H28年産	対比 (H30/H29)
コシヒカリ	33.8	57.1	67.6	59.1
キヌヒカリ	25.8	48.8	35.2	52.8
みずかがみ	77.7	71.4	85.5	108.8
秋の詩	48.7	64.6	77.9	75.3
日本晴	22.7	35.4	39.7	64.1

30年産の品質概況は、7月9日の梅雨明け以降、猛暑、日照りが8月末日まで続き、気象観測史上の記録を更新する日々でした。そのため基肥一発肥料は早期に肥切れとなり、未熟粒の発生が多くなりました。さらに、早生・中生品種の登熟期、出穂期に台風20・21号と滋賀県を暴風圏に巻き込み、特に21号は近年にない暴風で県内に多くの被害をもたらし、水稻では倒伏、傷もみなどの被害を発生させました。加えて、9月上旬から下旬までの間、日本列島上に秋雨前線が停滞し、収穫期を迎えた水稻を直撃し、大幅な刈遅れによる品質低下となりました。

コシヒカリ・キヌヒカリは、登熟期の高温障害、また夜温が高かったことによるデンプンの蓄積不足により心白及び腹白が2等以下の半数近くを占める結果となりました。

みずかがみは、他と比べ1等比率は多くありましたが、2等以下の原因としましては白未熟粒などの未熟粒が多くありました。

日本晴・秋の詩は、登熟期に台風20・21号の影響を受け倒伏し、傷もみなどの被害粒が多く整粒不足となりました。

表-2 JAおうみ富士の検査2等以下の理由

品種名	主な格付理由（2等以下の割合）
コシヒカリ	心白及び腹白（54.8%）・整粒不足（34%）
キヌヒカリ	心白及び腹白（41.4%）・整粒不足（38.6%）
秋の詩	整粒不足（63.3%）・心白及び腹白（16.2%）
みずかがみ	白未熟粒（56.2%）・その他着色粒（14.9%）

※^{はらじろ}腹白粒…腹部の白色不透明な部分の大きさが、その粒長の3分の2以上でかつ、粒幅の3分の1以上のもの

(4) 病害虫の発生状況

いもち病は、全体的には少ない発生量となりました。

紋枯病は、一部で発生が見られます。

カメムシ類は、平年並みの発生量となりました。

2. 平成31年産の米づくりの取組

(1) 品質向上対策

近年は、高温と低温、多照と寡照、多雨と寡雨の局在化、さらに大型の台風が接近するなど、特異的な気象が多く発生しています。平成31年産においても、こうした気象変動の影響を受けるおそれがあることから、品質低下を防ぐため、下表の品質向上対策技術を確認いただき確実に全ての対策が適切に実践されるよう、徹底することが重要です。また、近年の異常気象等発生時に対応した対策等も収量に大きく影響することから、JAより適時周知させていただきます。

表-3 品質向上対策一覧

乳白粒対策 (過剰な籾数の防止と稲体の活力維持)	土づくり	深耕(15センチ以上) 有機物のすき込み たい肥・土づくり肥料の施用(とれ太郎)
	施肥	基肥、追肥の減量(粘質田の場合) 生育に応じた穂肥 気象に応じた施肥(一発肥料の場合・高温時の追加施肥)
	植え付け	遅植え 細植え(1株あたり2~3本) 疎植(50~60株/坪、苗箱15枚~17枚/1反を目標) (みずかがみの場合極端な疎植は避ける)
	水管理	中干しの徹底(目安) 60株/坪植 → 1株当たり茎数: 17~18本 50株/坪植 → 1株当たり茎数: 20~21本 出穂前後3週間の湛水管理(カドミウム対策等)
胴割粒対策	早期落水防止(収穫5日前まで落水しない) 適期収穫(刈り遅れない) 適正な乾燥(高水分籾を急激に乾燥させない)	
着色粒(カメムシ)対策	畦畔2回連続草刈り(出穂2~3週間前と出穂期) 品種別に適期防除(特に「みずかがみ」や中生品種で被害が多いところは注意)	

(2) カドミウム対策

カドミウムの含有量が0.4ppmを超えるお米は食品衛生法で汚染米となり、米代金を返金しなくてはならない上に自己の費用で回収、廃棄処分をしなければなりません。平成30年産は含有量を超える汚染米は発生しませんでした。平成31年産以降も、下記のカドミウム吸収抑制対策を実施しましょう。

- ① 土づくり肥料「とれ太郎」を散布し、土壌PHの適正化(6.5以上)を図りましょう。
- ② 管理対策として出穂前後各3週間の湛水管理(水深約3cmの水張り)を徹底しましょう。

(3) 食味

食味向上対策として、食味分析に取組みました。結果につきましては、表-4のとおりです。食味値は、アミロースやタンパク質などの含有成分を測定し100点満点で表示されるもので数値が高いほどおいしいと言われ、80点以上がおいしいと評価されます。

もう少し詳しく見ていきますと、米の中のタンパク質とアミロースという成分が少ないほうが一般的においしいとされており、品種特性にもよりますが、①土作り肥料を施用し、地力を高める。②必要以上の施肥、遅い時期の施肥は控え、適期施肥を心がける。

(タンパク質の増加につながる) ③幼穂形成期以降の水管理をしっかりと行い、十分な水を供給する。(登熟不良はタンパク質、アミロースが必要以上に残ります) ④収穫適期を見定め、刈り遅れないようにする(刈り遅れるとアミロースが増加します)と言った栽培管理に努め、登熟促進に努めましょう。

また、おうみ富士「米」食味コンテストを昨年に引き続き開催します。表彰の内容につきましては、夏季農談会にてお示し致します。

表-4 食味値結果

単位：点

年度	品種	全サンプル	80点以上	80点未満	平均点
H30	コシヒカリ	2,960	2,299	661	82.5
	キヌヒカリ	2,153	1,010	1,143	77.1
	みずかがみ	388	192	196	78.7
	秋の詩	2,756	1,913	843	79.4
	日本晴	301	72	229	75.5
	合計	8,808	5,641	3,167	81.0
H29	コシヒカリ	2,838	1,138	1,700	78.7
	キヌヒカリ	2,092	249	1,843	73.8
	みずかがみ	401	85	316	76.1
	秋の詩	2,548	1,514	1,034	81.6
	日本晴	249	48	201	75.6
	合計	8,128	3,034	5,094	78.3

(4) 各品種の求める品質について

・コシヒカリ

ご存知の通り、全国的にも管内でも一番多く作付けされている主力品種です。需要も多く、価格的にも高単価で取引される品種ですので、1等米を目指した米作りが必要となります。米品質向上対策に記載してある基本技術を励行し、高品質な米作りを意識した栽培管理をお願いいたします。

・キヌヒカリ

コシヒカリの性質を受け継いだ良食味の早生品種です。外食向けや量販店からの引き合いも強く、多くの需要があります。つきましては品質より特に収量を重視した栽培管理と生産コストを抑えた施肥設計等に取り組んで頂きますようお願いいたします。

・みずかがみ (環境こだわり栽培必須)

平成25年より本格的に栽培が始まった滋賀県育成品種です。暑さに非常に強く、高温化でも未熟粒の発生が少なく品質が安定しています。また、平成27年~29年の3年間連続して米食味ランキングで特Aを獲得し、価格もコシヒカリに迫っており、主に量販店等の需要が高く、供給が追いついていない現状です。環境こだわり栽培が必須となっていますが、当JAとしても、作付の拡大をお願いいたします。また、穂の長さが短い特性があり極端な疎植は減収につながりますので、穂数を確保した栽培(50~60株/坪)をお願いいたします。

・秋の詩

良質・良食味の中生品種です。粒が大きく適度な粘りと甘さがあり、一定の需要がある品種です。滋賀県育成品種でもあり、コシヒカリと同様に高品質なものを求められておりますので、高品質栽培を心がけた栽培管理をお願いいたします。

※具体的な施肥設計につきましては、平成 31 年産栽培こよみをご確認下さい。

表－5 主要品種栽培面積の概要

区域	品種	H30 年度	H29 年度	対比 (H30/H29)
JA おうみ富士	コシヒカリ	770.9ha	776.4ha	99.2
	キヌヒカリ	586.0ha	590.6ha	99.2
	秋の詩	509.2ha	531.4ha	95.8
	みずかがみ	142.8ha	146.7ha	97.3

(5) カントリーエレベーター荷受け対応について

共同利用施設の再編により、平成 30 年産米のカントリーエレベーター荷受作業では、平成 30 年産米からサテライト方式により、守山・野洲地区の 2 拠点とし品種別の荷受管理・別処理もみの発生等、乾燥作業時におけるビン及びサイロの状況から、一部品種で区分管理をする事が不可能な状況となりました。

今後カントリーエレベーターの施設管理維持面から、生産者の減少および担い手への農地集積により稼働率が大きく低下し、今後もカントリーエレベーター施設の老朽化による修繕や維持に多くの費用が発生する事が予測されます。このままでは生産者の皆さまへ利用料の増加を検討していく事が必要となり、このような状況を回避するよう業務の効率化を優先した対応を行いたいと考え、サテライト方式による対応をさせていただき運びとなりました。

平成 31 年産につきましても生産者の皆さまにはご理解とご協力をお願いいたします。

(6) 個袋出荷分の「エコ富士米」仕分けについて

個袋出荷では、大規模農家によるフレコンの個人調製分の荷受量の増加や、取扱品種・品質の管理区分が多様化する事により以前より課題であった倉庫保管スペースでは手狭となっています。

しかし、平成 30 年産飯米は生産者の皆さまから、環境こだわり米での飯米引取り要望がございました。これを踏まえ当 JA としても、可能な限り生産者の要望に応えられるよう品種の限定及び事前に確認した必要数を把握し、環境こだわり米の仕分け管理を行えるよう対応したいと考えています。

また、環境こだわり米の仕分け管理を行うのは個袋出荷のみとなります。カントリー出荷では環境こだわり米の仕分け管理が行えませんのでご理解のほどよろしくお願いいたします。

(7) 平成 31 年産の飯用米及び販売用環境こだわり米品種

- ① 環境こだわり米 コシヒカリ (個袋出荷のみ)
- ② 環境こだわり米 秋の詩 (個袋出荷のみ)
- ③ 環境こだわり米 みずかがみ (こだわり栽培のみ) 3 品種とさせていただきます。

(8) 平成 31 年産のみずかがみの共同利用施設 (育苗・カントリー) の対応について

JA おうみ富士では、育苗センターは 30 年産同様「みずかがみ」対応を実施し、カントリーについては、野洲カントリーエレベーターのみの取り扱い予定をしています。詳細はカントリー運営計画でお知らせします。

(9) 飼料用米（吟おうみ）の取組について

生産調整による水田活用作物は、あくまでも小麦・大豆の生産振興により、農家所得の安定を図っていきたいと考えております。飼料用米については、小麦・大豆での生産調整の取組に対し、生産不適作地やばら転作集落におられる方に対し、取組みをお願いしているものであります。

その飼料用米品種を平成 31 年産飼料用米から、「秋の詩」から「吟おうみ」に品種変更させていただきます。

「吟おうみ」が多収性品種として産地交付金の交付対象となったことから、当 J A におきましても、少しでも所得増大を図る為、変更をするものであります。「吟おうみ」は、酒造用かけ米として開発された米であります。以前は当 J A 管内でも生産していたこともあり、酒造メーカーへ販売した実績もあります。

上記の理由により品種変更を行うものでありますので、ご理解願いますようお願いいたします。

(10) オーガニック米栽培（有機米栽培）について

滋賀県では、環境こだわり栽培の深化として、オーガニック（有機栽培）にて生産された米と茶の普及に取組み、環境こだわり農産物のブランド力の向上を推進されております。当 J A においても、付加価値の向上を目的とし、試験栽培に平成 31 年度から取組みます。

詳細は定まっておりますませんが、農家の皆様と共に取組んでまいりたいと考えておりますので、ご協力をよろしく申し上げます。

(11) 米政策の見直しの概要

表-6 経営所得安定対策

	項目	対象者	H27~28年産	H29年産	H30年産	H31年産
1	水田活用の直接支払交付金 (対象作物) 麦 大豆 飼料用米 米粉用米 WCS 加工用米 そば、なたね	販売農家 集落営農	麦・大豆、飼料作物 35,000円/10a			
			飼料用米、米粉用米 収量に応じ55,000~105,000円/10a H29年産より二毛作助成、耕畜連携助成は産地交付金へ			
2	産地交付金 県・市で設定	販売農家 集落営農 助成内容によりかわる	[県設定] 麦・大豆生産性品質向上助成(団地化型) H27 4,982円/10a等 H28 4,680円/10a等 H29 5,090円/10a等 H30 4,440円/10a(単価調整あり) H31 継続、単価未定			
			[市設定] 戦略作物および一般作物(野菜・花き・果樹等)に対する助成	[市設定] 戦略作物および一般作物に対する助成 H31継続、単価未定		
3	畑作物の直接支払交付金 (対象作物) 麦・大豆 そば・なたね	担い手※	麦 1等Aランク 6,410円/60kg	麦1等Aランク6,690円/60kg H28年産比 +280円	麦1等Aランク 6,740円/60kg H30年産比+50円	
			大豆 1等 12,520円/60kg	大豆 1等 9,940円/60kg H28年産比 ▲2,580円		
		非担い手	×			
4	収入減少影響緩和対策 (対象作物) 米・麦・大豆 収入減少額の9割支援 米・麦・大豆の収入を合算) 負担割合 国3:生産者1	担い手	法改正H27.4.1施行 経営規模要件 無 加入者のみ			

※ 担い手とは、「認定農業者」、「集落営農組合」および「認定新規就農者」となります。

(12) 収入保険制度

収入保険制度とは、農業経営全体を対象としたセフティーネット対策として、青色申告を実施している全農業者(個人・法人)を対象に、全ての農業経営品目についての農産物の自然災害に加え、価格低下に対応して収入減少を補てんするための制度です。

※収入保険制度は平成31年(2019年)より制度が始まります。

平成32年(2020年)以降新たに加入を検討されている方は、平成31年(2019年)分の青色申告実績ができれば、平成32年(2020年)1月から加入できます。

青色申告に取り組む場合は、平成31年(2019年)3月15日までに税務署に青色申告承認申請を行います。

平成32年（2020年）から加入する場合のイメージ

平成31年（2019年） 10月～11月	平成32年（2020年） 12月末	平成32年（2020年） 1月～12月 (税の収入の算定期間)	平成33年（2021年） 確定申告後（3～6月）
-------------------------	----------------------	---------------------------------------	-----------------------------



尚、類似する制度として現行の農業共済・収入減少影響緩和対策（ナラシ対策）との併用はできず収入保険制度との選択となります。自らの経営に最適な制度を適切に選択できるよう、保険料や補てん金などを比較できるように、NOSA I ホームページ上で簡易なシュミレーションソフト（暫定版）で確認できます。

(13) 平成31年（2019年）環境保全型農業直接支払交付金の制度見直しについて

○予算配分において、全国共通取組への優先

※全国の申請額が国の予算額を上回った場合には、地域特認取組の単価が減額される可能性があります。

※全国共通取組は、カバークロップの作付、有機農業、堆肥の施用の3つとなっており、それ以外の取組は地域特認取組となります。平成32年（2020年）以降、直接支払交付金の取組単価が満額で支払われるのは全国共通取組のみの実施となります。

○地域特認取組の支援対象除外

・草生栽培（果樹・茶）・バンカープランツの植栽（野菜）を除外
(取組面積が0.5ha未満なため)

○国際水準GAPの取り組み

※GAP（Good Agricultural Practice：農業生産工程管理）とは食品安全、環境保全、労働安全等につながる取組です。

※次年度に引き続きGAPに取り組まれる方は、昨年同様GAP理解度・実施内容確認書の提出が必要です。

(14) 米の生産目標について

主食用米の需給バランスをとるために、引き続き、生産調整に取り組む必要があります。

市町農業再生協議会から示される主食用米の生産目標を守って、需要に応じた米生産に取り組んでいただきますようお願い申し上げます。

II 小麦

1. 平成30年産の小麦について

平成30年産の麦の生育は10月下旬の記録的な降雨の影響で播種が大幅に遅れ、その後の気温の低下により生育が遅れました。また、生育量が小さいことから基肥一発肥料を施用しても窒素分が吸収されず流亡してしまった可能性が高いため、追肥で10アール当たり窒素成分1.5～2kgを施用するよう指導を行いました。3月以降は気温が高く生育は平年並みまで回復し、6月5日に梅雨入りしましたが、それ以降も好天が続く収穫期間中に降雨は比較的少なく、赤かび粒、発芽粒もなく、収穫は順調に進みました。

収量については、一部播種遅れにより茎数が減少したが多くは平年並みまで回復し、前年度に比べ荷受け重量は増加しました。

また、平成30年度の小麦の品質評価基準（表-7）では、JAおうみ富士の農林61号がBランク、シロガネコムギAランクと評価されました。

表-7 平成30年産 おうみ富士管内の小麦の品質評価実績

年度	銘柄	タンパク	灰分	容積重	フォーリング ナンバー	評価
	基準値	9.7～11.3%	1.60%以下	840g/ℓ以上	300以上	
	許容値	8.5～12.5%	1.65%以下	—	200以上	
平成30年	農林61号	9.9	1.63	826	393	B
	シロガネコムギ	9.9	1.43	811	350	A
平成29年	農林61号	10.2	1.65	845	391	A
	シロガネコムギ	10.0	1.51	820	375	A

※Aランク基準 : 基準値を3つ以上達成し、かつ、許容値を全て達成している。

※Bランク基準 : 基準値を2つ達成し、かつ、許容値を全て達成している。

※Cランク基準 : 基準値を1つ達成し、かつ、許容値を全て達成している。

: 基準値を2つ以上達成しているものの、許容値を達成していない。

※Dランク基準 : 基準値を全く達成していない。

: 基準値を1つ達成しているものの、許容値を達成していない。

2. 今後の管理

平成31年産は天候に恵まれ播種作業が順調に進みました。その影響で平年より茎数・葉数は多く、草丈は長く生育は進み旺盛となっています。平成31年産小麦の評価基準をAランクとするため、以下の技術を徹底し、収量増大・品質向上に努めましょう。

(1) 排水対策

分けつ期の湿害は、茎数不足から穂数不足に至るとともに、根の伸長が不十分となって登熟期まで影響が及びます。そのため、減収だけでなく、品質低下につながりますので排水溝の管理を徹底して排水対策に努めましょう。

(2) 施肥

1月追肥以降は、生育を見ながら分施を基本に、穂肥、実肥の施用時期、施肥量（表-8）を調整します。（全量基肥体系）また、評価基準をAランクにするためには、小麦のタンパク質含量と容積重を向上させるために開花期頃に行う「実肥」が重要です。実肥の施肥については、小麦の現地農談会でご説明します。

表-8 穂肥・実肥の施肥時期・量

品 種	穂肥 1 回目 【2月上旬】		穂肥 2 回目 【2月下旬】		実肥 【4月中旬】 開花期	
	農林61号	NK-C20 高度化成 444	20kg 30kg	NK-C20 高度化成 444	10kg 20kg	NK-C20 高度化成 444 尿素
シロガネ コムギ	NK-C20 高度化成 444	20kg 30kg	NK-C20 高度化成 444	15kg 20kg	NK-C20 高度化成 444 尿素	20kg 20kg 10kg
品種共通	麦笑	40～50kg				

*本年の生育状況を勘案し、穂肥散布時期は少し早めています。

3. 平成32年産（2020年産）に向けた小麦の品種転換について

現在当 JA では、シロガネコムギ及び、農林61号を主力品種とし作付を行っていただいておりますが、滋賀県内の実需者からパン用小麦の生産を求められており、管内全体の取り組みとして、パン用小麦である「ミナミノカオリ」の作付に向けた品種転換について検討を行っております。経営所得安定対策では、補助金単価が、パン用以外の小麦の作付より高いことから、今後もこの補助金が継続されれば、高品質小麦を生産いただいた場合、生産者の皆さまには所得の増大を実感していただける内容となっております。

今後、転換をはかっていきたいと考えておりますので、ご理解をいただきますようお願いを申し上げます。

※ミナミノカオリは、赤カビ病の耐病性は低いですが、耐倒伏性が高く千粒重が重くうどんこ病や赤さび病に強い性質があります。

Ⅲ 大豆

1. 平成30年産大豆生育概況

6月下旬の播種時期は天候に恵まれ、播種作業が順調に進みましたが、7月上旬の記録的豪雨の影響で多くの場所で冠水・浸水の被害が発生し、出芽不良に伴う播き直しが行われました。7月9日の梅雨明け以降は高温寡雨の乾燥が続き出芽不良や欠株の発生、生育の遅れが目立ち、6月に播種されたほ場と7月中旬に再播種されたほ場では生育量に大きな差が生じました。また8月の開花期の干ばつの影響で落花・落莢が発生し、平年に比べ着莢数は大きく減少しました。

度重なる台風の影響で風当りの強い圃場では莢が飛んでいくことがあり、9月上旬からの降雨で日照不足となり子実肥大が不良となりました。全ての品種で平年より主莖長は短く※最下着莢位置は低く莢数は少なく、小粒傾向でした。

※最下着莢位置…地面から一番下までの大豆の莢の高さ

2. 滋賀県産大豆について

フクユタカ

豆腐としての加工適正は良く、全国的にもっとも生産量の多い品種です。食用大豆の需要の中でもっとも多いのが豆腐需要であり、その需要先から加工適性・歩留り・味という点で相対的に高い評価を得ている強みがあります。

また、豆乳向けとしても使用されており、今後も相応の需要があるものと思われます。しかしながら、全国的に作付けされているため、産地間での品位の優劣評価が厳しくなっており、高品質・安定生産を目指していく必要があります。

ことゆたか

倒伏に強いので浅耕うね立て栽培や不耕起密植栽培などの新しい栽培技術を活用しやすい品種です。ただし、裂莢しやすい傾向があり、収穫適期の幅が短いので注意します。滋賀県で試験栽培の行われている難裂莢性品種「ことゆたかA1号」の試験栽培をおうみ富士で行い、今後転換を図っていきます。

3. 今後の大豆づくりに向けた取組み

大豆については、「ことゆたか」と「フクユタカ」を中心とした作付が定着しており、今後とも作期分散と品質向上に取り組めます。特に畑作物の直接支払交付金単価（数量払）が検査等級により単価設定されていることから、外観品質である形質の向上に取り組めます。

「ことゆたか」は耐倒伏性が強く加工性に優れていますが、裂莢しやすい特性があり、「フクユタカ」は、排水対策の強化と適期防除の励行、開花期頃の畝間灌水の実施による莢つきの向上と落下防止を図ります。

販売については全農しがとの契約栽培を中心に取組み、品質低下の要因となる汚損粒の防止のため朝夕の収穫回避に向けた啓発や、広葉雑草が多い圃場については刈取り時の草汁による汚染粒防止のため、後期除草剤散布など指導に取り組めます。

4. 平成31年産大豆の管理について

平成30年産では豪雨による浸水、高温寡雨による干ばつが起こり、一部で畝間灌水や深植えをしていただくよう呼びかけを行いましたが、今後このような天候が続くことが予想されますため、状況に応じて深植えや畝間灌水を行ない、発芽不良を起こさぬよう注意が必要です。

IV 園芸作物

表-9 冬野菜の病害

病害名	べト病	根こぶ病
発生する野菜	ねぎ・たまねぎなど	白菜・キャベツなどのアブラナ科
感染 発病の状況	葉に大型の黄白色の病斑が生じ、表面に白色のかびが生じます。 病状が進むと萎れ枯死します。	晴天日に葉がしおれ、曇天日には回復します。 根に大小不揃いのコブが多数できます。
原因	主に土壌感染で発病し感染源となり他の株に感染します。たまねぎの場合気温15℃前後で発病します。 また、4月以降に感染している株の周囲の株に2次感染し発生が拡大します。	排水性が悪い・地温が高い・酸性土壌であるなどがあります。
対策	発病した株は抜き取り処分します。 予防防除を中心に早期防除に努めます。 予防剤・・・ダコニール1000 1,000倍 6回以内 収穫7日前まで 予防・治療剤…ベトファイター顆粒水和剤 2,000倍 3回以内 収穫7日前まで。 ※たまねぎは水をはじくため、薬剤効果を高めるために必ず展着剤（アプローチB1・グラミンS）を併用します。	本作では病原菌の根絶は難しいため、発生したら被害株は早期に取り除き、次回作前に土壌殺菌剤で酸度矯正を行います。 土壌殺菌剤…フロンサイド粉剤 1 aあたり3～4kg 2回以内 播種・定植前。

表-10 樹木病害虫

病害虫名	アブラムシ・カイガラムシ	アメリカシロヒトリ
発生する樹木	ミカンなど	サクラ・カキなど
発生症状	新芽に発生し放置するとすす病(葉が黒くなる)の原因となります。	樹の葉を食べ尽くす毛虫。食べ尽くした後は樹から降りて他の野菜も食べます。
防除方法	アブラムシ 4月から5月 防除剤…スミチオン乳剤 1,000～2,000倍 5回以内 収穫14日前まで。 カイガラムシ 6月及び8月 防除剤…スプラサイド乳剤 40 劇物 1,000～1,500倍 4回以内 収穫14日前まで 葉の裏まで十分に散布	カキ 防除剤…スミチオン乳剤 1000倍 3回以内 収穫45日前まで サクラ 防除剤…ジェイエース水溶剤 1500～2000倍 5回以内発生初期 年2回 1回目:6月上旬～7月中旬 2回目:8月上旬～9月中旬 散布の際は、巣を破るように散布

表-11 果樹の防除

果樹名	カキ、ミカン
防除方法	<p>落葉やせん定した枝を適切に処理し、病虫害の越冬場所を減らします。 鎌等を使って、古くなった粗皮を削りとること。害虫の越冬場所を減らすことにつながります。</p> <p>越冬病虫害に効果のある薬剤を散布します。</p> <p>みかんは、12月下旬～1月中旬、又は3月に散布します。</p> <p>かきは、12月下旬に散布するか、芽の動きだす前に散布します。</p> <p>防除剤…トモノール（マシン油）機械油乳剤 95（カイガラムシ類、ハダニ類、サビダニ）</p> <p>みかん（かんきつ） 冬期 30～45倍 夏期 100～200倍</p> <p>かき（落葉果樹） 16～24倍</p>

注意点 散布時期が遅れると薬害につながります。

※劇物の購入には印鑑が必要です。また劇物の配達はできません。

※代表的な薬剤を掲載しております。

※農薬のお問い合わせは、各営農センター営農購買課にご確認下さい。

表-12 2～3月の野菜作業ポイント

	春にんじん	じゃがいも
ポイント	<p>3月下旬頃に播種します。過度の早播きはとう立ちを促します。</p> <p>発芽させるため十分に灌水を行ない光好性のため土を軽く被せます。本葉が3～5枚時に低温にあると花芽ができてしまうので、トンネルで保温します。</p> <p>肥料施肥は基肥を6割・追肥を4割とし追肥は間引き直後の1～2回とします。</p>	<p>3月下旬、あまり早植えすると遅霜に当たって地上部が枯れてしまうことがあるので、早植えは避けます。</p> <p>また、保温効果や倒伏防止、実が直接日光に当たらないように土寄せを行います。土寄せは追肥施用のタイミングに行います。</p>
	イチゴ	キャベツ
	<p>3月になったら雑草の発生と果実の汚れ防止のため黒マルチをします。マルチは降雨後に実施すると水分保持ができます。</p>	<p>雨除けハウスなどを所有されている方は、3月上旬に播種、育苗後定植すると7月上旬に収穫できます。収穫時期が高湿となるので作りすぎは禁物です。</p>
	レタス	ほうれん草・小松菜・水菜
	<p>3月上旬に播種しますと5月下旬に収穫できます。肥料切れは結球が悪くなることがあるため、基肥は多めに施用します。</p>	<p>葉物野菜は播種時の水管理で生育が変わりますため、発芽まで乾燥させないよう管理を行います。</p>

夏野菜の栽培

○野菜の多くはPH6.0～6.5の弱酸性でよく育ちます。ほうれんそう、葱類はやや高めを好み、さつまいも、じゃがいもなどのイモ類は酸性を好みます。日本は雨が多く、石灰の流亡により酸性土壌が多いため、作付ごとに石灰を施すことで適正PHを維持できます。石灰類の施用は100g/1㎡とし、酸性土壌を好むイモ類は半分程度を施用します。

○夏野菜の収穫を長く楽しむには、地力をつけます。堆肥などの有機物を施用します。

2 kg / 1 m²が目安です。未熟な堆肥は生育不良を招くので、完熟たい肥を施用するか、植え付け行う1ヶ月前に施用します。

○排水を良くする為、ほ場周りに排水溝を掘るか、高畝にして排水性を確保します。

○連作を防ぎます。トマトとじゃがいも、なすなど同じ仲間の野菜が植わっていないところに植え付けるようにします。

○ほ場が狭く、どうしても連作となる場合は、接ぎ木苗などを活用しましょう。

○種子を発芽させるには、水・酸素・温度・光の4つの条件があります。また野菜の中には、発芽の際に光を好む好光性と逆に光を嫌う嫌光性があります。1つでも条件が揃わないと、発芽不良や徒長苗の原因となります。また野菜には播種の適期や適温がありますため、播種前には確認しましょう。

○夏野菜は初期の生育が早く、微量要素が不足し欠乏症がおこりやすくなります。特にカルシウム欠乏症は、トマト・ピーマンの尻腐れの要因となりますため、「畑のカルシウム」を併せて施用し欠乏症を防ぎます。

マルチシートの種類と役割

主に雑草の抑制や地温を上げるために使用するマルチシートですが、その種類は多くまた雑草の抑制効果や地温を上げる効果は様々です。そのため、作付時期に併せマルチシートを使い分けることが重要です。

表-13 マルチシートの種類と特徴

種類	機能と特徴	効果的な作物と作付時期	地温向上効果	雑草抑制効果
透明マルチ	光をよく通し、地温を上げる効果が非常に高いですが、反面雑草を抑える効果は低いです。 気温が低く、地温をしっかり上げたいときに最適です。	11月に植え付けるたまねぎ、3月上旬～下旬に植え付けるじゃがいも、さといも、種をまくだいこん、にんじんなど。	非常に高い	非常に低い
緑色マルチ	地温向上効果と雑草抑制効果は黒色と透明の中間に位置します。 地温を上げつつ雑草の対策を行う時期に向きます。	4月上旬～中旬にまくとうもろこし、えだまめ、いんげんなど。	高い	低い
黒色マルチ	緑色より光を通しにくく地温は上がりにくいですが、雑草を抑える効果は高いです。 地温を上げつつ旺盛する雑草を抑えたい時期に向き、汎用性が高いです。	4月下旬～5月中旬に植える果菜類、5月中旬～6月中旬に植え付けるさつまいも、9月中旬～下旬に種をまくだいこんや植え付けるレタスなど。	やや高い	やや低い
銀色マルチ	光を反射し地温が上がらず、雑草を抑える効果が高いです。 また反射光を嫌うアブラムシやアザミウマ類の忌避効果があります。	8月下旬～9月上旬に種をまくだいこんや、植え付けるレタスなど。	低い	高い

